

岡山のとしょかん

岡山県図書館協会報
(第119号)

学校図書館のこれから

はじめに

昨年 2014 年は学校図書館にとって大きな節目の年になった。6 月には学校図書館法（以下、学図法と記す）の一部が改正され、「学校図書館の利用の一層の促進に資するため」学校司書を配置する努力義務が学図法上に明記された。

それを受けて、日本図書館協会は学校図書館職員問題検討会を設置し、学校司書の「資格・養成課程」や「司書と司書教諭の関係」等をテーマに、12 月から毎月論議を重ねている。また文部科学省は、学校司書の資格・養成の在り方や資質向上等に係る調査研究事業費を 2015 年度予算に計上した。

学校司書配置について地域差はあるものの、学図法改正後、新たな取り組みや動きもあり、新聞や TV 等で伝えられている（注 1）。クリアしなければならぬ課題は多いが、この学図法改正を最大限生かして、学校図書館充実のために、市民・県民の声を自治体に届けると共に、学校図書館機能を活用した豊かな教育実践の構築と発信が、求められている。

学校図書館の役割

「学校図書館の機能を活用する」とは、単に図書館を活用して本に親しむとか、調べ学習をするということに留まらない。

学校図書館は、豊かで多様なコレクション構築（資料構成）と図書館ネットワークを背景に資料提供等の図書館サービスによって子どもたちや教職員の知的自由を保障する機関である。その図書館サービスを担うのは、図書館情報学を学んだ専任・専門の学校司書であり、教師の授業づくりと図書館サービスが結びつくことによって、豊かな教育活動を生み出すことができる。

そのことは、「図書館資料を収集し、児童又は生徒及び教員の利用に供する」ことを掲げた学校図書館法や、「学校図書館は、情報がどのような形態ある

いは媒体であろうと、学校構成員が情報を批判的にとらえ、効果的に利用できるように、学習のためのサービス、図書、情報資源を提供する」と、学校図書館の使命を規定するユネスコ学校図書館宣言とも基本的に合致する。

子どもたちの豊かな学びを保障するために

「最近の子どもにはイメージ力が圧倒的に不足していて、授業を組み立てるのが困難。パソコンではなく、本がイメージ力を育てることを低学年の授業の中で、改めて感じた」と語ったのは、小学校のベテラン教師である。

また岡山市内の庄内小学校 6 年生は、総合的な学習の時間で、「東日本大震災の復興を考える」という大きな課題に取り組んだ。

子どもたちは、じっくり本や新聞を読み込み、A MDA 事務局員や新聞記者の話等も聞いて、一人一テーマを設定する。複数の多様な資料に当たって調べ、得た情報を整理し、まとめる。発表原稿の作成と発表。発表を通して東日本大震災の現状や復興に向けての課題を知り、「自分にできることはなにか」を考え、実行した。

図書、雑誌、新聞の切り抜き、関連した HP（国立国会図書館等々）からのデータ等の資料収集はもとより、子どもたちの調べ・発表する全過程に、学校司書は教師と共に関わり、サポートしている。アンケートを見ると、「頑張った、学校図書館を活用した、達成感があった」と 90 数%の子どもたちが答えている（注 2）。

このような子どもたちの問いや課題と真摯に響きあう教師の授業づくりと結んだ学校図書館活動の構築が、今、求められている。

（注 1）2015 年 1 月 8 日付朝日新聞（大阪本社版）31 面、読売テレビ「かんさい情報ネット ten」他

（注 2）庄内小のレポートを永井の視点で要約。

（山陽学園大学 永井悦重）

「地域共創型」の中国学園図書館

中国学園図書館の特色の一つは、地域に根ざした、地域に開かれた大学図書館であることです。中国学園図書館では、学生や教員に対する教育・研究支援を充実させる一方、地域貢献・地域連携を図書館運営の基本の一つに掲げて、取り組んできました。

平成十六年度から「子ども」をコンセプトにした特色ある蔵書構築に力を入れ、平成十七年度から地域の方々を対象に「中国学園図書館えほん講座」や「ランチタイムコンサート」を図書館において開催し、地域の方々楽しんでいただくとともに本学の学生の発表の場としました。また、本学卒業生に加えて、一般市民に対しても図書・資料の貸し出しを開始しました。近くに図書館がない吉備地域の人々から大変喜ばれ、学外利用者登録者数も年々増加しています。

中国学園は、もともと保育学科や子ども学部があり、多くの子どもに関する蔵書を持っていましたが、平成二十年度からは、更に地域と共に創る『「地域共創型」図書館えほんミュージアム』構想に取り組みました。この構想は図書館の絵本をはじめとする蔵書や催しを媒体として、地域と大学と学生が繋がり、地域と共に学生が育つことを目指しました。三年間、子どもコンセプトの特色ある蔵書構築を進めた結果、中国学園図書館の絵本の蔵書は、国内外の絵本や学生の手作り絵本など県下有数と自負しています。これ以後も、年度によってコレドコト賞受賞作品、0・1・2歳児向け絵本など、テーマを持って収書しています。

平成二十四年度には館内の一角に「キッズコーナー」を設置し、学生が実際に地域の子どもの読み聞かせの練習や実演ができようになりました。平成二十六年度からは地域の家庭文庫である「プーさん文庫」の読み聞かせの場として利用されています。現在、地域の親子が中国学園図書館をよく利用しており、絵本の読み聞かせを楽しんでいる光景がしばしば見られます。

平成二十五年度から本学教員が「男女共同参画社

会って？」など、身近なテーマを地域の方々に分かりやすく講義する「図書館 de プチ講座」を二カ月に一回のペースで実施しています。地域の方々から「とても分かりやすく、勉強になった。」と感想も多く寄せられ、好評です。その他、小学生や学生や一般社会人を対象に読書感想文を公募して「図書館大賞」を贈る「読書感想文コンクール」を実施しています。



〔図書館でクリスマス 2014 (えほん講座)〕

また、近隣の中学生が、毎年、図書館に「職場体験」に来ます。その時の職場体験の様子や学生が地域の施設等に実習やボランティアに行った時の研究成果物や授業成果物を図書館に数多く展示しています。これらの展示物を地域の親子がよく鑑賞しており地域交流の一つとなっています。



〔授業成果物展示 木の実アート〕

このように、中国学園図書館と地域の人々との連携を深める取り組みは、これまで少ない図書館スタッフが知恵を絞り工夫を積み重ねた賜物で、課題や困難が多くありますが、今後とも「地域共創型」の中国学園図書館を充実させていきたいと思っています。
(中国学園図書館 森上敏夫)

**常に動いている図書館をめざして！
かもがわ図書館
ロマン高原かよう図書館**

吉備中央町は、平成二十三年に、かもがわ図書館とロマン高原かよう図書館の二館を開館し、四年目を迎えています。

“ふたつでひとつのちいさな図書館”ですが、館内展示やサービス、イベントの企画実施において、昨日とちがう発見がある図書館“常に動いている図書館”をめざしています。

そのための起動力の一つとして、図書館をとりまく皆さんとの協働を大切にしています。

☆コラボで楽しむ朗読会「銀河 cafe」☆

図書館と地元おはなしグループとのコラボにより、宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』の朗読会を七月から十一月の毎月第二金曜日の夕方、五回にわたって開催し、珈琲などのドリンクとシフォンケーキを味わいながら、カフェの雰囲気ですっきりと朗読を楽しんでいただきました。

会場の飾りつけも、毎回趣向を凝らし、ある回では地元の方の協力で本物のススキをたくさん飾り、また別の回では紅葉を飾るなど、スタッフが、朗読会に参加する皆さんのことを思いながら、季節感のある空間づくりをしました。

特にススキは、お話の中にでてくるので、演出効果がありました。



[銀河 cafe]

「とても素敵な朗読で、夢の世界を旅してきました。」「贅沢な時間を過ごすことができました。」「自分で読んだときより一層感動しました。」などの声があり、朗読を楽しんでくださった皆さん

も、スタッフも、にこにこ笑顔のひとつときでした。朗読の後、ホームプラネタリウムで余韻を楽しみながら、次回へ・・・。

☆ご注文ありがとうございます！出前図書館☆

読書活動の推進、図書館の利用促進のために、教育機関や福祉施設、町民の集まりの場所へ、図書館の所蔵する資料を持って出向き、展示・提示や貸出・返却を行っています。

乳幼児と保護者の方のクラブへは、絵本や子育ての本、実用書、雑誌などを持っていき、展示・貸出をしました。絵本の読み聞かせや簡単な工作をして、親子で、友達どうしで、一緒に楽しんでいただいています。



[出前図書館]

P T Aの協力により小学校・幼稚園へも、子どもに人気のこわい話やスポーツの本、読み物に加え、科学や歴史

などの本を、また保護者には、人気のある小説、雑誌や実用書を出前しています。

「図書館はちょっと遠くて行けないので、出前してくれてありがたい。」「こんな本もあるんだね。」「今度は図書館へ行ってみようかなあ。」という、うれしい言葉に支えられています。

二月には、町の主催する講演会へ出前を行い、テーマに関連する本を展示・貸出しました。

活力ある町づくりの一助になればとの思いを持って、ご注文（声かけ）いただいた所へ出前図書館を行っています。

地域の方々や行政、教育機関と手を取り合っただの各種イベント・伝承発掘聞き取り調査・図書館サービスにより、いつも図書館から元気を発信中。

横断検索システムへの加入、町内中学校とのシステム連携、公民館などとの本の配送連携も行っていきます。

今日も“常に動いている図書館”をめざして！

(吉備中央町図書館 田原茂美)

邑久中読書ボランティア「ゆめ読」

毎月第一金曜日の朝八時を過ぎると、絵本を携えた大人たちが、邑久中学校の二階の会議室に集まってくる。邑久中学校で絵本の読み聞かせをしてくれるボランティア「ゆめ読」の人たちだ。

メンバーには、保育園・幼稚園などで読み聞かせをしている三つのグループと、地域の民話の語りや腹話術のできるメンバーや、初めてのチャレンジの男性もいる。熱いお茶を飲みながらメンバー同士あいさつを交わすと、図書委員の中学生が迎えに来る八時二十分まで絵本のチェックをする。ベテランの先輩方が音読を繰り返し、絵本の位置を確認する様子に私のような初心者は緊張感が増す。

二十分になると図書委員が各学年の棟へと案内してくれる。廊下では各クラスの図書委員が待っていてくれ、教室へと案内してくれる。教室に入ると、四十人程もいる生徒たちの顔を見回してクラスの様子を窺う。そして簡単な自己紹介をして十分間絵本を読む。生徒たちの視線、表情を時折りチェックしながら、安心したり、本の選択ミスだったかもと反省したりする。

絵本の読み聞かせがスタートしたのは、平成二十四年十一月だ。隣の中学校区に住む知人から、「司書の方と二人で絵本を読んでいる。」と聞いていた。一体どんな絵本を読んでいるのかな？と思っていた矢先、その方が邑久中に転任されてきた。また瀬戸内

市に読み聞かせのボランティアグループを立ち上げた方が地域におられ



た。この二人が出会い、 [ある日の「ゆめ読」]

邑久中学校に、「ゆめ読」ができた。メンバーの誰もが「中学生に絵本？」と思ったようだ。その質問の答えを一人一人から聞いていない。しかし、スタートからのメンバーが一人も欠けることなく、十七ク

ラス全てで続いている。皆元気で本当にありがたい。

生徒たちからこんな言葉をもらった。「ゆめ読が始まって、久しぶりに絵本にふれ、とても懐かしく思い、自分でも読んでみようと思う。」「ふだん読まない絵本を知ってよかった。」「中学のよい思い出となり、楽しかったです。」「中学生にとって絵本なんかつまらないと思っていましたが、そうでもないことを知りました。」などの言葉で「中学生に絵本？」という懸念が吹き飛んだ。

二十六年度になり「公益財団法人 福武文化振興財団教育研究助成」を受けられることとなり、「ビブリオバトル in 保育園」「まちなかビブリオバトル」「絵本フェスタ」等を計画した。

まず邑久中学校で中学生の実行委員会ができた。朝読書以外での生徒とゆめ読との交流が始まった。どうすれば園児たちに楽しんでもらえるバトルになるのか、話し合いと練習が繰り返された。授業の間の休み時間にも準備がされていた。八月末の三つの保育園でのバトルは、各園それぞれに工夫がされていて、園児たちにも大変喜んでもらえた。生徒たちの頑張りにも心から拍手を贈った。

十二月末の「まちなかビブリオバトル」開催少し前の十一月に、隣の中学の生徒を招待して練習会が開かれた。



〔まちなかビブリオバトル〕

どの本もすばらしく紹介され、全部読みたくなって投票に大変迷った。本番は、一般の参加もあった。「好きな本について好きなだけ語れる」という楽しさが分かったような気がする。

三月の「絵本フェスタ」では、滋賀県の絵本作家市居みかさんに講演と読み聞かせをして頂く。このフェスタの準備等を通して中学生たちがもっと絵本に興味を持ち、将来誰かのために読んであげたいような絵本に出会って欲しい。

私もゆめ読の絵本を「今日の絵本、よかった。」と言ってもらえるように絵本探しに精を出そうと思う。

(読み聞かせボランティアグループ
「ゆめ読」 尾崎真弓)

平成 26 年度岡山県図書館協会 研修参加助成事業報告 (1)

研修名：平成 26 年度全国公共図書館研究集会

期 日：10月9日 (木)～10月10日 (金)

会 場：群馬県高崎市立中央図書館

■概要

〈第1日目〉

基調講演：テーマ「地域に根づく図書館活動～つながる図書館、つなげる司書～」

講師：糸賀雅児氏 (慶応義塾大学)

図書館による「課題解決支援サービス」を行い、他施設や地域、ボランティアなどと連携して、地域での問題解決に取り組んでいく。地域住民だけでなく、行政支援サービスに重点を置くことも大切である。

事例発表

①「まちづくりに生きる図書館とは？～持ち寄り・見つけ・分け合う広場をめざして～」

嶋田学氏 (瀬戸内市教育委員会新図書館開設準備室)

これからの図書館は、来館者への資料提供という従来の直接サービスだけでなく、課題解決や、地域・行政などと連携して、まちづくりに生きる存在になることが望まれている。地域や住民を知り、これからの図書館をどのようにしていくかを考えていかなければならないと思いました。

②「非日常を振り返って～地域と図書館が考えること～」

高橋将人氏 (福島県南相馬市立中央図書館)

地震による被害、原発事故による全市避難など、多くの負担を強いられた自治体です。非常時に図書館で起こったこと、図書館だからできたことなどを紹介されました。普段から、様々な状況を想像し、想定してみるなどして、非常時に信頼される図書館づくりをしていくことの大切さを話されました。

③「来館困難な方への図書館サービス～元気はいたつ便を中心に～」

天野良枝氏 (愛知県田原市中央図書館)

「元気はいたつ便」は、図書館に自力で来館することが困難な住民に対して行っているサービスです。

行政だけでなく、様々な機関と連携をとり、資料の提供を行っています。新しく取り組んでいる事例として、高齢者福祉施設への「訪問サービス」や「団体貸出サービス」、「グループ回想法」などについて紹介されました。

④「安全・安心な図書館サービスへ～危機管理を考える～」中沢孝之氏 (群馬県草津町立図書館)

災害、高齢者のトラブル、様々なクレームなど、以前の図書館にはなかった問題がたくさん起きています。職員同士のコミュニケーションや、情報・事例の蓄積や共有が大切であることなどを話されました。

〈第2日目〉

報告

①情勢報告 森茜氏 (日本図書館協会)

2013年度の図書館の状況、図書館関係のトピックスの紹介

②諏訪康子氏 (国立国会図書館)

「NDL東日本大震災アーカイブ (愛称：ひなぎく)」の説明や活用方法などの紹介

全体会 (パネルディスカッション)

1日目の事例発表の補足説明と、質疑応答がありました。

〈印象に残った言葉〉

- ・図書館がしていることが見えるようにする (アピールの大切さ)
- ・自治体内での信頼関係をつくる (いろいろな情報を得られる)
- ・図書館の中にいるだけでは田舎の図書館員は働まらない (外に出て行き、地域や人を知る)
- ・人と人がつながっていくことが危機管理につながる
- ・「語れる司書」を目指す (議論できること)

■研修成果 (感想)

研修を通じて、いろいろな「つながり」が図書館サービスの基本となっていくと感じました。講演や事例発表を聞いて、このスペースには書ききれないくらい多くの収穫を得ることができました。今後の業務に生かしていきたいと思います。

(笠岡市立図書館 徳山佳代子)

平成 26 年度岡山県図書館協会 研修助成参加事業報告 (2)

研修名：第100回全国図書館大会 東京大会

期 日：10月31日(金)～11月1日(土)

会 場：明治大学駿河台キャンパス

■概要

〈第1日目〉

開会式・記念フォーラム(パネルディスカッション)

記念フォーラム「図書館文化を明日(あした)の力に」～言葉を育てる・社会をつなげる・未来を創る～

このフォーラムでは全国各地における図書館や地域の、本との出会いに関する取り組みなど、映像を交えて紹介し、パネリストが経験に基づきながら、読書や図書館のあり方を語り合うというものでした。フォーラムの中で、各パネリストは、本や図書館が人や地域を結びつける役割を担うという認識を示しました。また、今後図書館に期待する役割にも言及しており、パネリストの一人、松浦氏は「本を人と思っけて付き合い、その付き合い方も自由であり、そのような付き合い方ができるということを図書館が伝えてほしい」と述べました。

〈第2日目〉

第11分科会 児童青少年サービス「読書が培う子どもの未来～児童図書館の力」

基調報告 坂部豪氏(日本図書館協会児童青少年委員会委員長)

坂部氏は児童図書館員への期待が年々高まる中、職員の非正規化が進み、児童サービス担当の経験年数が短くなる傾向について危惧しています。氏は、子どもと本を結びつけ、豊かな出会いをしてもらうためには、経験の積んだ児童図書館員が必要であると結びました。

事例報告「児童資料の選書について—調布市立図書館の事例—」森ゆかり氏(調布市立図書館)

選書方法についての説明がありました。選定記録となるレビュースリップを作成し、評価した本は、後からでも検証可能なようにしているそうです。複

数の職員が評価することは、組織として本を選ぶことになり、客観的・理論的に評価する目が養われるといった利点や、キャリアのある職員から若手職員へ仕事の継承につながるといった利点を挙げていました。

事例報告「学校図書館支援の現状と課題」齋藤亜記子氏(南相馬市立中央図書館)

事業は今年度で三年目を迎え、図書館の定期的な開館、図書館の利用増加など効果が上がっているそうです。今後の課題には、運営方針や理念の強化、教育委員会との更なる連携を挙げています。

事例報告「大阪府立中央図書館の取り組み」藤田章子氏(大阪府立中央図書館)

旧大阪府立国際児童文学館が移転したことにより、児童サービスが拡大。読書環境を整えるためには、直接サービスによる裏付けを大事にしていきたいとしています。

事例報告「国際子ども図書館の現状とこれから—児童サービス担当者を支援するために」田中千穂子氏(国際子ども図書館児童サービス課)

基本的な役割と、現在行っている事業の説明がありました。上野公園近隣施設との連携行事では、本と異業種の人とを結びつけることにつながり、お互いに学ばいい機会になっているとのことでした。

助言 松岡享子氏(東京子ども図書館)

児童サービスに従事した者がその仕事で得たものを記録に残し、その経験を組織と共有する意識を持つことが重要としています。

■研修成果

フォーラム中のパネリストの発言には、図書館の姿が伝わっていないと思われる発言もあり、図書館の活動がいかにか一般の人々に伝わりにくいかを実感し、反省する部分がありました。図書館外の理解を得られるように、図書館の活動を伝えていくことが更に必要であると感じました。フォーラムでも、分科会でも司書の役割として、地域と人と本を結びつけることを挙げていました。そのような認識を持って、日々の業務に取り組みたいと思います。

(岡山市立図書館 平田涼子)

平成 26 年度岡山県図書館協会 研修参加助成事業報告 (3)

研修名：平成 26 年度

中国四国地区図書館地区別研修

期 日：12 月 9 日(火)～12 月 12 日(金)

会 場：島根県民会館(島根県松江市)

■概要

基調講演「図書館と地方自治

—政策実現のエンジンとしての図書館—

渡邊斉志氏 (国立国会図書館関西館)

図書館は「利用者」のための施設として考えがちですが、そうではなく「市民」のための施設、つまり、「利用しない人」を含めた全市民のための施設であり、そのように機能するためには、どんな視点と活動が必要なのかということを学びました。また、司書は図書館の専門家ですが、役所の職員として「行政の専門家」という一面もあり、地域全体を見渡して、専門知識を活かしながら、地域が直面している課題の克服に向けて貢献するという、両方ができてはじめて専門家として評価されるということでした。



[図書館と地方自治—政策実現のエンジンとしての図書館—
—渡邊斉志氏]

講義・演習

「入門・図書館サービス計画のつくりかた」

豊田高広氏 (田原市図書館)

図書館サービスを立てるに当たっての必要な考え方を学びました。図書館サービスとは、図書館の使命を達成するために、司書、資料、図書館施設をはじめとする図書館固有の資源を使って人が他者のために行う、価値創造と価値提供の活動です。有効なサービス計画を立てるためには、環境分析、市場戦略の基本から考え、利用者をできるだけ具体的にイメージして立案することが重要になる、ということ踏まえた上で、事前課題の人口統計等をもとに、グループでサービス計画を立てる演習を行いました。

講義「図書館から防災情報—東日本大震災と「明日の県立図書館」—

平野昌氏 (三重県産業支援センター)

中川清裕氏 (三重県立図書館)

三重県立図書館が県立図書館としてのありかたを考えた「明日の県立図書館」を、どのような考えでまとめたのかと、県立で行った東日本大震災への取り組みを紹介いただきました。東日本大震災への取り組みについては、県立図書館が企画のベースを作って県内の図書館で参加を呼びかけし、県立が作成した共通のフライヤーのフォーマットを使って展示を行い、県内一丸となって取り組んだということでした。

■研修成果

今回の研修の講義では、全体として「連携」と「まちづくり」が重要なキーワードであったように感じました。図書館は行政機関の一部として「全市民のための施設」ということを視野においた活動を考える必要がある、という基調講演をはじめとして、どの講義でも、「図書館」という機能を最大限に生かしながら、どう市民の方に貢献していくのかを、それぞれに模索された成果を発表頂いたように思います。この研修を受けて、全市民の方に貢献するという、そもそもの図書館の存在意味を踏まえながら、図書館の機能や連携の可能性について、考え続けたいと思います。

(瀬戸内市立図書館 樋野祐美)

第 89 回教養講座報告

「人と美を結びつける場所づくり」

期日：平成 26 年 12 月 4 日（木）

講演：「大原美術館の魅力と取り組みについて」

講師：守田 均氏（大原美術館 調査役）

森川 政典氏（大原美術館
業務担当マネージャー）

大原美術館の魅力

映像を見ながら大原美術館の歴史や成り立ちを話していただきました。個人的に美術館に行ったことはありますが、その絵がどうしてこの美術館にあるのか、どうして描かれたのか、というお話を聞くうちに、作品を通じて感じた想いを超越した、衝撃にも似た感動を受けました。それはその絵画がそこに展示してある意味を知り、より深く作品にふれられたからだと考えます。原稿を手にはせず、よどみなく話す調査役の守田均氏が、大原美術館創設の礎である大原孫三郎や児島虎次郎に重なって見える感覚がありました。私は今勤めている図書館の魅力についてどれだけ語ることができるだろうか……。講座の序盤から猛烈にあせりを感じながら話に聞き入りました。

取り組みについて

講座の後半は、前半の話を踏まえつつ、その魅力をどう伝えるかという具体的な取り組みを業務担当マネージャーの森川政典氏に紹介していただきました。

森川氏はテレビ局の美術の仕事を手掛けた経歴をお持ちで、岡山市政 100 年の記念事業のミュージカルづくりやチボリ公園の運営も経験され、その中でホスピタリティーの精神や C S ・ E S（顧客・従業員満足）の重要性を実感されてきました。それは大原美術館の創始者である大原孫三郎や次代の大原總一郎の思いに通じるものでした。つまり創始者の思い＝DNAを引き継いで大原美術館は成り立っているということでした。「今を生きる人にとって意義あることとは何か考え続けること」「そのために美術館は生きて成長してゆくもの」とおっしゃっていました。

具体的には本館特別貸切のイブニングツアー、くらしき朝市三斎市タイアップ企画ワンコイン 500 円 DAY、大原家が所有していた建物をみてまわる歴史探訪、花屋さんとタイアップした出前講座、学校向けにも休館日の貸切りサービス学校まるごと美術館・・・アイデアを果てしなく持っていていらっしゃいます。形や枠にとらわれず使命を果たすために果敢にチャレンジしたらよいのだと思いましたが、何のためかという目的を見失わないようにしなければなりません。「目的がしっかりしていればブレたとしても元に戻ることができるし、やっていいこと・いけないこと、かえていいもの・いけないもの見極めが自然とできる」という言葉には気持ちが奮い立ちました。

図書館は美術館?!

真庭市には三つの図書館と四つの図書室があります。それぞれに歴史や成り立ちがあります。蒜山図書館に勤務して一年目の自分には何もかもが手探りでした。蒜山図書館は蒜山に住んでいる人たちが作り上げてきた図書館です。まさしく蒜山の人たちにとって意義ある場所としてスタートしていたのです。私はその思いを繋いでいかなければなりません。来館者の数は多くありませんが、来られる方とは様々なきっかけでお話ができるようになり、その会話の中から展示会も開催することができました。図書館は美術館?!とばかりに蒜山在住の八十六歳のおじいさんの水彩画を図書館中に飾っています。花や鳥などを素材にしています。その素材のことも丹念に図鑑などで調べて書き添えてくださっています。素晴らしい作品です。ご覧になりたい?・・・どうぞ岡山県最北端の蒜山図書館へ。三月まで展示しています。

（真庭市立蒜山図書館 大田栄子）

平成 27 年 3 月 1 日発行

〒700-0823

岡山市北区丸の内 2-6-30

岡山県立図書館 図書館振興課内

岡山県図書館協会 会長 三村 修

TEL：086-224-1286